別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏名　　GUTIERREZ CERVANTES Lenin Emmanuel
論文題目　Glimpses Across the “Garden of Battle”: Three Case Studies of Japanese War Haiku from the Second Sino-Japanese War (1937-1945)
（「いくさの庭」を眺め：日中戦争 (1937-1945)における日本の戦争俳句の３つの事例研究）

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学　准教授　ミギー　ディラン

委　員　　名古屋大学　教授　　日比　嘉高

委　員　　名古屋大学　教授　　長畑　明利

委　員　　東京工業大学　名誉教授　モートン　リース

論文審査の結果の要旨

別紙１－２

本論文は『ホトトギス』や『俳句研究』を初め戦時の俳句文芸雑誌を三年間かけて網羅的に調査し、有名・無名の俳人を問わず、秀句２００句以上を英訳して分析を行った論文である。また軍事体制下の俳句創作を巡る各問題を検討できるように三つの事例研究を取り上げて、検閲の影響について議論した上で戦場・銃後俳句の主題、歌風、美的評価の変遷について考察する。論文の構成は三つの事例研究からなる。第一章は火野葦平の戦記小説『麦と兵隊』（１９３８年刊）を原作として、日野草城、秋元不死男、渡辺白泉が翻案した『俳句—麦と兵隊』について考察するものである。従軍兵士の火野と違って、この翻案に取り組んだ俳人三名は実際に戦場体験がなく、詠んだ俳句にはリアリティーがないため、失敗作として酷評された。この共同作を皮切りに戦争俳句の批評基準が大きく変化した。第二章は中国本土に従軍した兵士、長谷川素逝が戦場で詠んだ前線俳句について考察するものである。当時、まだ前線にいる俳人が少なかったため、長谷川の俳句と書簡は二年間かけて『ホトトギス』に掲載され、そして１９３９年に『砲車』として出版された。『砲車』の序文、跋文、広告などのパラテキストから分かるようにホトトギス派の評論家は長谷川素逝を戦場俳句の申し子として評価し、写実的に戦争を描く無季俳句を唱えるようになった。第三章は、女流俳人の銃後俳句について考察するものである。多くの俳人が匿名で俳句を発表したため、文学史に位置付けるのが難しい。そこで本論文はこの俳句を主題によって分類し、女性の日常生活を仄めかす部分に焦点を当てて分析を行う方法を用いる。またニュースリール、新聞などのメディアがどのように女流俳人の俳句創作に影響したかについて議論する。銃後生活を知る上で好資料となるが、これまでの先行研究では殆ど取り上げていない。従って本論文は女流俳人の研究への多大な貢献となる。

これまでの戦争文学の先行研究では、小説、短歌についての論文が多く、俳句についての研究が比較的少ない現状である。しかも、高名な俳人の著作全集、戦争俳句のアンソロジーがその半数を占めており、句を一つ一つ精読し丹念に解釈するような論文は僅かである。しかし、Cervantes 氏の論文は、俳句のみならず、その創作プロセスを再構築する目線で、書簡、日記帳、文芸雑誌、再刊した場合は著作全集、広告などのエフェメラまでに及ぶ資料調査の徹底を極める。本論文は批判的書誌学の方法を用いてテキストのマテリアリティに着目することによって戦時・戦後にかけて活躍した俳人がどのように作品を訂正したのか追究し、またテキストの変遷によって俳人の戦争に対する思惑がどのように変異したかを明らかにしようとしている。戦時メディアと俳句創作の関係について新しい知見と着眼点の斬新さを有するものとして戦争俳句の研究分野へ貢献を為し得る論文である。以上の理由によって、審査員全員が一致して本論文を高く評価し、博士論文として十分な水準にあると評価した。

ただし、そのような評価を前提として審査員から論文に対して幾つかの指摘、アドバイスがなされた。

外部審査員のモートン教授からはプロパガンダと俳句の関係について考察する重要性を認めるものの、全ての句をプロパガンダとして捉える傾向があるとの指摘があった。そこで瀬尾育生氏の『戦争詩論』（２００６年）などの先行研究が取り上げる「戦争詩」と「愛国詩」という用語を用いて、戦意高揚を主題とする「戦争詩」と愛国心を表す「愛国詩」と区別をつけるべきではないかとの指摘があった。また分析の対象となる俳句に関しては、無名の俳人による句を減らして、文学的質の高い秀句だけに絞れば、日本文学以外の研究分野で活動する学者も戦時俳句の価値を認めてくれると助言した。最後に俳句の英訳についてはスペイン語を母国語とする Cervantes 氏が日本語の俳句を英語によく訳したと評価しながらも、今後は英語母語話者の詩人に

見てもらって英訳を磨いた方がいいという指摘があった。
　日比教授からは戦争俳句をただのプロパガンダではなく、もっと俳句として読むべく、文学的要素をより綿密に分析すれば、研究に厚みが出るとの指摘があった。例えば、花鳥風月を取り入れた高名の俳人による作品と比較して軍兵士の俳句は主題・歌風などの面でどのような相違点があるのか、明確化した方がよいと助言した。また中国本土の戦場を舞台とする俳句に関しては、漢語と中国名所が多く出るため、もっと唐詩など中国古典文学の典拠を分析の視野に入れるべきではないかという指摘があった。最後に第三章については、数多くの女流俳人による作品の翻訳、分析を評価したものの、もう少し銃後の日常生活、習慣、物質的文化についての先行研究を参照するように促した。
　長畑教授からは予備審査の指摘を踏まえて俳句と川柳はどう違うのか、詩歌のジャンルについてもう少し推敲が必要という指摘があった。俳句と川柳のみならず、戦場俳句と銃後俳句、戦争俳句と愛国俳句、女流俳人と男性俳人による作品の相違点についてもっと議論した方がよいという指導である。また、全体的に１９４０年以前に発表された俳句の数が多いのに対して、真珠湾攻撃以後、とりわけ太平洋戦争の終盤に入った時期の俳句が比較的に少ないという指摘がなされた。確かに刊行部数を劇的に減らして、若しくは完全に出版活動を休止することにより、俳句文芸雑誌は少なくなったが、当時の「時事詠」として食料管理の強化、東京大空襲などを主題とする俳句をもう少し取り上げれば、戦時俳句の全体像を把握できるという助言である。
　ただし、このような指摘があるのは、この論文に更なる発展の可能性があることを示しており、Cervantes 氏がこの論文の基礎を更に発展させてくれることを期待したい。
　以上、総合的に評価して、審査員委員会は、本論文は博士論文として十分に水準にあり、よって「合格」と判断した。